

永崎 晋 先生のこと

本多 省三

Memory of Late Susumu Eisaki

Shozo Honda

最近死ということばが頭をよぎることが多い。あくせくと毎日を生活しながら、年末の喪中の挨拶の数に自分の死というものを思ったり、人の死というものを考えることが多くなった。

長く高校の生物の教員として、また県の生物学会の会員として多くの活動をされた永崎 晋 (えいさき すすむ) 先生が亡くなられたのは昨年。その報に私の死に対する思いがさらに強くなっている。どんな立派な人でも必ず迎える死というものを・・・。

さて、永崎先生とは同じ生物教師の先輩として、さらに県の生物学会の役員として30年余りお付き合いさせていただいた。強い信念の上に笑顔を絶やさず、自分の道を邁進される姿には、憧れとともに近寄りたいたいものを感じることもあった。自ら栄達を望まれず生物の道を歩まれる姿に、その心の強さを深く感じた。

先生は長く勤められた富山高校のPTA会報(1983年12月発行)に短文をのせておられる。その一端を紹介する。

「5時半になりました。生徒下校の時刻です。戸締まり消灯をして、すぐ下校しなさい。」チャイムの音とともに毎日繰り返されるこの放送を耳にする度に、少しみじめな気持ちになってしまう・・・チャイムの上はまだ一声掛けねばならないとはどうしたわけだろう。自分で判断して行動する若者を育てるのであれば、もっと別の働きかけ方があるのではないかと気にかかる。

・・・過保護のぬくもりの中では、自立の芽が育つはずはなからうと思いつつも・・・

このことから先生の人柄と教育に対する姿勢

が偲ばれる。生物の会合でもいつも鋭い指摘をされ、私はびっくりしたり流石と驚いたりしたことを思い出す。

ところで、先生には長く生物学会の監事として学会の運営にご協力いただいたことはいまでもないが、ここ数年役員を誰かに代わってほしいといわれ続けていたのを、私が無理に頼んでいたようで、お体の悪いのも知らず申し訳ないことをしたと深く悔やんでいる。早く別の方に役を渡すべきだったと・・・。

いろんな思いが走馬燈のように浮かんで来て、短い中では先生のお人柄はいいつくせないけれども、この辺で筆をおきたいと思う。

改めて先生のご冥福をお祈りし、お別れのことばとしたい。



韓国旅行のスナップから 後列左から2番目

大田 弘 先生を悼む

長井 真隆

Memory of Late Hiroshi Ohta

Shinryu Nagai

本会創設以来会員であった大田弘先生が、平成11年9月21日ご逝去されました。享年84歳でありました。会の発展のためにご尽力されましたご功績に対して深甚の敬意を表するとともに心からお悔やみ申し上げます。

先生は大正4年5月21日、富山県入善町棚山新で生まれ、昭和11年3月富山県師範学校を卒業、入善町等の小学校のほか、富山県理科教育センターに奉職されました。その間理科教育はもちろんのこと、体育・道徳教育に、また富山県小教研理科部長、校長としての手腕を発揮される一方、富山県の植物研究に情熱を傾注されたのであります。

先生は学生時代、植物研究のほかスポーツでも活躍され、昭和10年に富山県代表のサッカーのキャプテンとして、第17回全国中等学校蹴球大会で準決勝にまで勝ち進むという快挙を遂げられました。また、卒業後は地域の魚類や鳥類・扇状地の研究をするなど、先生はスポーツで鍛えた肉体と、飽くなき探求心によって地域の自然研究を多面的・総合的にされたのであります。なかでも一般に苦手とするスゲ・シダ類の研究や、白馬岳、朝日岳方面の植生で大きな業績を遺されたのであります。

昭和30年のことですが、私には先生に対する強烈な印象があります。それは東京大学理学部植物学教室に内留していたとき、上野の国立科学博物館に「日本植物誌」の著者大井次郎先生をお訪ねしたときのことで、大井先生は「富山に大田弘先生がいるのにどうしてここへ・・・。」と訊ねられ、先生は書架から大田弘著「越中越後国境方面の植物目録」を示されたのです。戦後の物資不足のなかでの著作でガリ版刷りでした。大田弘先生については、以前からお名前はお聞きしていたものの、まさか国立科学博物館で先生の報文を拝見するとは思ってもおらず、しかも太平洋戦争という異常時での研究で、まさに驚きでありました。

こうした先生には富山県内のスゲ属などの植物目録、各地の植生、町村誌、各種の自然環境保全調査報告書など多くの著作があります。なかでも『富山県の植生 富山県 宮脇昭編書(1977)』の分担執筆は、富山県の植生全体を全国レベルで捉えた最初のものであります。また、『富山県植物誌(1983)』は多少資料不足であっても今書かないと書く機会がない、富山県のリストの叩き台を作るつもりで執筆されたのです。先生の声掛かりで小路登一先生と私に加わり、大学ノート数冊の原稿に、私らの知見を加えて執筆しました。後にこの裏打ち標本として富山市科学文化センターに植物標本9,345点を寄贈され、『大田弘植物コレクション(1995)』にまとめられています。

先生は富山県自然環境保全審議会鳥獣部会長、富山県植物公園整備委員会委員、富山県植物友の会会長、富山県椿同好会会長、その他多くの委員を歴任され、杉沢の沢スギの国天然記念物指定や富山県自然環境保全地域の指定、立山アルペンルート緑化研究のほか、富山市科学文化センター、富山県中央植物園の整備にも貢献されました。富山新聞文化賞、県政功労表彰、自然公園50周年表彰、勳五等雙光旭日章などをお受けになりました。



国際植生学会の折り、左から大田弘先生、エレンベルグ会長、筆者長井(昭和59年8月1日)